

一衣帯水

先日（8月1日）、韓国政府は、鬱陵島（ウルルンド）などを視察するためソウル近郊の金浦空港に到着した新藤義孝衆院議員ら自民党議員3人の入国を拒否しました。松本外務大臣は同日、申駐日韓国大使を外務省に呼び抗議し、入国を求めたとのことですが、一国の国会議員の入国を拒否するというのは、極めて異例な事態であり、遺憾なことだと思います。

同時に、今回の騒動は、竹島を巡る領土問題の根深さを改めて示した形になっています。

新藤議員一行は、訪韓は単なる視察目的だといいますが、全く政治的意図がなかったかといえ、私にはそうは思えません。韓国政府も、面だった理由を説明していませんが、新藤議員等の政治的意図をおもんばかったのだろうと拝察しています。また、韓国国内の反応もかなり過剰であり、ヒステリックに過ぎますが、韓国政府は世論の動向にも配慮しなければならない苦しい立場だったのではないかと思います。

ただ、今回ハッキリしたことは、日韓両国の関係は、文化的、経済的な交流が進んできているとはいえ、微妙な硝子細工のようなものだということです。

明治43年に日韓両国は、韓国併合に関する条約を結び、これによって韓国は、日本の植民地となりました。日本の韓国統治は日本が太平洋戦争に敗れるまで続きましたが、この間、創氏改名をはじめ様々な統治政策が取られる一方、独立運動に対する弾圧も行われ、多くの朝鮮人の血が流されました。

日本が中国大陸や朝鮮半島に食指を伸ばしたのは、当時、欧米列強に挟まれながら自国の独立を維持するためであったとしても、それは日本にとっての大義名分であって、韓国の人々にとっては、日本からの抑圧された歴史でしかありません。私たちは、今日においても韓国の人々の心の底に流れている「恨」

の深さに、思いをいたす必要があります。

領土は、国家存立の前提です。それ故に、これまでも地球上の様々な地域で、血で血を洗う戦争が繰り広げられてきましたが、竹島は一度として韓国の領土であったことはないと理解しています。勿論、韓国には韓国の理屈があるのだと思いますが、我が国は竹島以外にも北方領土や尖閣諸島という領土問題を抱えているのですから、政府は、戦略性を持って、毅然と対応していくことが必要です。

しかしながら、現在、竹島は、韓国が実行支配しています。日本が、武力で取り戻すことができない以上、その構図は、今後も変わりません。

このように、日韓両国間には「のどに刺さった骨」ともいうべき課題が横たわっていますが、しかし日本と韓国は一衣帯水の関係にあるのです。文化においても経済においても、両国はこれまで以上に緊密に連携していかなければなりません。

新藤議員一行の動機がどのようなものであれ、一時のパフォーマンスでは問題は解決しません。

私たちには、過去の歴史を踏まえながら、負の遺産を両国の確かな絆に変えていく努力が求められています。

日韓両国のリーダーの皆さんには、次の時代を担う若者のためにも、問題解決に向けて、大人の対応と大いなる知恵を発揮していただきたいものです。

(塾頭 吉田 洋一)